

# 発達過程における更年期症状の出現頻度に関する調査研究

松村三千子、杉野 文代、湯舟 貞子

一般に男性では45歳から65歳、女性では閉経をむかえる45歳から55歳を更年期と称されるが、この時期は多彩な自覚症状を呈する。女性の更年期における不定愁訴は血管運動神経・自律神経症状、精神神経症状、運動器系症状に代表され、更年期障害あるいは更年期症状は日常生活でコンセンサスが得られているが、男性の更年期症状については調査報告例が少なく、女性の更年期ほどコンセンサスが得られていないことが考えられる。

男性の更年期障害及び更年期症状は報告例が少ないために、症状にひたすら悩み解決策を模索することになる。

男女間の程度の差こそあれ、発達過程においてホルモンバランス低下は避けられないことであり、男性といえども更年期症状は出現する可能性がある。

今回、更年期症状についての出現頻度の差異を調査し、一定の結論を得たので報告する。尚、今回の報告においては、更年期症状が比較的出現しやすいとされる男性45～65歳、女性45歳～60歳を分析対象とし、その結果に焦点を絞って述べることにする。また比較の対照群として65歳以上の女性を用いて検討を試みた。

対象者平均年齢：対象群71.2（標準誤差=0.54）

男性群平均年齢：56.15歳（標準誤差=0.53）女性群平均年齢：51.84（標準誤差=0.56）である。

## I. 調査の概要

### 1. 調査対象および調査方法

兵庫県K市N区、兵庫県M市に居住または就業、就学する人に対し、文書にて趣旨説明、拒否権のあること、個人が特定されない方法で結果を公表することを通知し、郵送法（一部集合調査）を実施した。

### 2. 調査人数

青年期：配布枚数 150名 回収130名（回収率86.7%）

壮年・老年期：配布枚数 724名 回収467名（回収率64.5%）

### 3. 質問紙の構成

予備調査として、K短期大学に在籍する学生に対し、更年期症状の主な不定愁訴、ダミー項目を加えて、調査票を作成した。更年期不定愁訴については、簡略更年期指数（SMI）および『更年期障害の診断と治療』を参考にした。予備調査で得た回答に対し信頼度の検討を加えたところ、80%の妥当性を得たので、その項目にフェースシートおよび労働・生活程度を加えて調査項目を設定した。

## II. 結果

1. 更年期症状自覚頻度：対照群-54.8% 男性群-17% 女性群-45.8%に更年期症状の自覚を認めた。

### 2. 更年期症状の主な因子

対照群：感情の起伏因子、沈みがち（精神）因子

男性群：沈みがち（精神）因子、頭痛・目眩・吐き気の因子

女性群：沈みがち（精神）因子、肩こり・筋肉の緊張因子

更年期症状の沈みがち因子は、どの階層にも共通していた。

## III. 今後の課題

更年期症状の不定愁訴がある人に対し性ホルモン検査などを行い、自覚症状との関連を確認する必要がある。

男性更年期症状については、更年期症状が鬱病の引き金になるのかを検証する必要がある。